



『二週間の戀』の女主人公エドナ

# 短い戀と長い戀の新レコード

永代美知代

## (一) 二週間の戀

### 登場人物

女主人公 米國の歌女エドナ・リチャードソン  
 主人公 白耳義の樂長ヴァンデルベルグ  
 其の他 エドナの母リチャードソン夫人等

紐育の離婚裁判所は最近離婚の一新記録を誌しとめた。ミス・エドナ・リチャードソンがある主人公に會つて、求愛されて結婚し、そして僅た『二週間』でその全部の愛を失つた——まづ

たくこんな風に迅く過ぎ去つた戀の記録は、近頃珍らしい。

エドナは紐育州の産である。黒き瞳、皓き齒、芳紀十六歳の窈窕可憐なる處女であつた。その母で、その保護者たるリチャードソン夫人の眼には、勿論至極のねんねえで、歌女としてはまた清淨無垢の小娘であつた。

この母娘が紐育市の或座に出た同じ週に、妙な男が停車場へ飛び降りた。ブラハム・ヴァンデルベルグと云つてアポロン・オペラ會の樂長である。白耳義の産で、そつつかしい、早口の飛行機が廻轉ばかりしてゐるやうな男である。ホテルへ飛び込

むや否や、部屋の約束をして、五分目にはもう往來へ飛び出し、やがて劇場へ着くとすぐ下稽古を始める。『準備！』始め！』とその忙しいこつたら！

練習が済むと、ある人がこの男にミス・エドナを紹介した。エドナは最初、オヤ／＼小ぼけな外國人だこと、髪の毛がひどく灰色が／＼つてゐるわ。口髭を何てまア強

### 盛裝のエドナ



らしくチツクで堅めたものだらう？ 穴の開くほど人を見てサ——要するに「變テコな小ぼけな男だ」と思つた。

一方彼は初對面の五分目に、もう、當の相手のミス・エドナにその第一印象を話しかけた。『あなたは無垢です、わが女神です！』エドナが母の傍へ逃げる、その母の手を彼はキスしやうとする。母たる夫人はそれを拂ひ退ける。すると彼は突然エドナの『芳紀十六』の無垢な手にキスして、少時それを弄くり廻すのでエドナは颯と紅くなる——リチャードソン夫人も、怒つて眞紅

になる。

『何て圖々しいんでせう、私の眼の前で、今會つたばかりの娘にラブしようなんて。』

後で夫人は、人にさう云つて憤慨した。その晩、一座がさる處から招

\*待された時、彼はエドナの顔ばかり瞞めて、三度も自分の名前を呼ばれてからヤツと答辭に立つた。

その翌日、彼は花束を持つて出掛けたが、果して、夫人に追ひ歸された。

三日目に、彼はさる料理屋で、エドナに結婚を申し込

んだ。

『私そんな事、存じません——何時か又どうぞ』

エドナがさう口籠ると、『何時か又ですつて？ 僕はもうあなたをラブして死にかゝつてゐるぢやありませんか。ね！ すぐ市役所へ行つて、すぐ結

婚式を擧げて下さい———すぐ———今!

「だつて僕は、あなたを愛しとるぢやありませんか!」  
エドナの頬は紅くなり蒼くなつた。その時母親が娘を探して  
駆けつけた。  
「氣狂! お歸んなさい!」  
彼を叱りつけて、早速娘をある「隠家」へ潜ませた。そのうち  
急用ができたので自分だけ四五日家を留守にした。

ヴァンデルベルグは四苦八苦した。心當りといふ心當りへ電  
報電話を濫用してエドナの居所を訊き合はせた。夫人の旅行先  
さへ電報を十通から打つて、もし娘を呉れなければ死んで了ふ  
と脅した。

する間に、エドナはさすがに「芳紀十六」である。何時とも  
なく心が萌えてゐた。姿鏡の前に立つて、「母さんもちつと情が  
強すぎるわ」位の事を呟いてゐた。

一週間目に、あるおせつかいな女が、ヴァンデルベルグにエ  
ドナの隠家を教へた。彼は忽ち電報を打つた。

「余はマダム・マーセツシーとウォーセスターに在り、マダム  
はおん身を待つ。すぐ來訪せよ」

マダムの名は天下に高い、そのマダムが自分を待つてゐる!  
エドナの胸は跳つた。彼女はすぐウォーセスターに走つた。あ  
ゝとして! その停車場へ降りた十分間の後には、彼女はもは

や「ヴァンデルベルグ夫人」といふ肩書を持つて、その良人た  
る彼と共に樂しげに歩いてゐた。

その晩、その町で開かれた大合奏會で、彼の眼は絶えず歌女  
の一人に注がれてゐた。エドナは良人が自分を探してゐるもの  
と思つて、結婚のリングの輝く手を差しのべて合圖を與へた。

然るに! 此方に向いた彼の眼には何の情熱も無かつた。  
情熱の無い二週間! それが二人の凡てであつた。——結婚  
後八日目にエドナがホームシックにかゝつて、母の家へ歸つた  
時には、ブラハムは既う何人目かのミセスを持つてゐた。天才  
ブラハムは戀の道にもまた驚くべく早く迅く進み去るといふ大  
天才を持つてゐた。

エドナは最初それを信じなかつた。  
「お母さん、私早く快くなつてブラハムの家へ歸りませうね、  
ブラハムは淋しいでせうよ」  
など、云ひくした。母親は笑つた。

「莫迦だねお前は、あの人は二週間より長持ちした事のない人  
なのだよ」

娘はまだ信じなかつた。いや、信じ度くなかつた。で母親は  
探偵を雇つた。探偵は、今のブラハム夫人はエドナから六人目  
の、疾せこけた、眼の強い女だといふ報告を持つて來た。

とうとう「二週間」目の日に、紐育の裁判所は、ブラハム。  
ヴァンデルベルグ氏と、ヴァンデルベルグ夫人エドナとの離婚

を宣告した。この傷ましい新記録は、今や  
米國藝壇の一つ話になつてゐる。

### (二) 八ヶ年間の戀

#### 登場人物

女主人公 米國西ヴァージニア元老議員  
故エルキンス氏令嬢カセリン。

エルキンス

第一の男 伊太利皇帝第三の從弟アブル  
ツチ公爵

第二の男 米國ワシントンの富豪ウキリヤム。  
ヒット

公爵の敵 伊太利皇帝第一の從弟オースタ公  
夫人ヘレン

その他 伊國皇太后マゲリタ及び外交  
官等

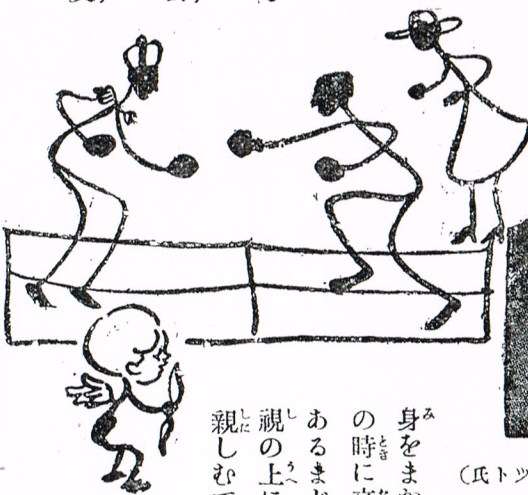
戀の振子は又一搖れ、大きな圓を巴里  
の交際季節に描き、伊、米、佛は勿論、  
晝暗きアフリカの蠻地にまでも、その振  
動を及ぼさうとする。米國西ヴァージニ  
ヤ州の富豪、故の元老院議員エルキンス  
氏の令嬢で、その相續人である米國稀代の美



(伊國のヴァルツ公爵)



(國來のウキリヤム・ヒット氏)



人、ミス・エルキンスを中に伊太利の  
ブルツチ公爵と、米國ワシントンの俊  
秀ウキリヤム・ヒット氏との對戦は、今  
將にその佳境に入らうとする。ミス。  
エルキンスは今や遂にその八年間の忠  
實なるアメリカの戀人に酬をとらせる  
か、はたまた同じく忠實な戀の公爵に  
身をまかせるか、その何れかを決心すべし最後  
の時に立つてゐる。この忙がしい時代にまたと  
あるまじき戀のローマンズは、斯うして世界環  
視の上に鳴り響くか、それともローマの空氣に  
親しむであらうか。

### ◎彼女の心の秘密

アブルツチ公爵は伊太利皇帝の從弟  
であつて、世に時めく人の娘達に慕は  
れ、又その何れを選ぶも自由な身の上  
である。アメリカの如何なる大富豪の  
令嬢でも貰ひたいと云へば、喜んで應  
ずるであらう。強健な爽快な伶俐な人  
で、遠征家として、勇敢なる武人とし  
て、且つ又、高雅な性格の人として世

に知られて居る。

ミス・エルキンスの魅力に觸れてから、足掛け八年になる。心の底から彼女の典麗を愛して、一日もこれを忘れぬ。凡そ全歐洲を探しても、この公爵ほど自分の戀に確かな人は無からうと思はれる。さればこそ公爵は雨のやうに降る縁談を一つ一つに拒けた。最近にはルーマニヤの内親王エリザベスの手を振り拂ひ、コンノート内親王バトリシヤを謝し、今一人露西亞のオルガ内親王をも斷つた。

斯うした斷乎たる謝絶をするからには、公爵はミス・エルキンスを妻に得るか、若し得ざれば一生獨身で墓場へ赴くか、何れは堅い決心がなくてはならぬと噂されてゐる。殊に公爵は戀の敵手のウキリヤム・ヒットが、最初ミス・エルキンスに約した七年間の猶豫が已に去年の暮で満期になつた事を知つてゐる。その上、あの意地悪な、つまり公爵を一生獨身で通させる爲めに、あらゆる手段をめぐらした戀の邪魔者である嫂、オースタ公爵夫人が南アフリカへ獵に出掛けた留守である。愈々の決心は今こそつけられねばならぬ。

つまりローマには、公爵を支へる邪魔者は一人も居なくなつた。即ち公爵たる者は今一度ウキリヤム・ヒットと最後の雌雄を決しなくてはならぬ。勝つものはそれ何れぞ？

誰か女の心を語り得よう？ カセリン・エルキンス嬢の最も親しい友達でさへも、嬢がこの二年の間、狩に日を送つた間に

はせ、ら笑つて、只管カセリンの爲めに盡してゐた。

併しながら公爵は最初、このアメリカ人の事をさのみ念頭に置かず、千八百六年の一月から三年の間たゞ秘かにミス・エルキンスに求愛して居たが、何かの機會からその秘密が世間に解り、殊に外交團の萬犬が一時に吠え立てた。その時、初めて公爵はこの秘密漏洩の裏面に、ヒットと云ふ手強い敵手のある事を知つた。ヒットは勿論心の底から彼女が容易く公爵のものになり得ないと云ふ確信を持つてゐたので、黙つて待つてゐた。

◎最後の決戦の結果は？

ローマの社交界は普通通り、今も矢張り二派に分れて居る。その一派は、公爵夫人がアフリカへ出掛けたのは、とうとう斷念して公爵を自由にさせる積りだと稱へ、他の一派はミス・エルキンスがヒットに嫁ぐ決心をしたので、夫人は安心して行つたのだ。でなければ、決してローマを去り得まいと推察する。ワシントンでもその説が勢力を占めて、已によりヒットとエルキンスとへの祝物の下相談が進んでゐる。

だが、如何してたつた一人の女が、而も伊太利人でない公爵夫人が、何故アブルツヂ公爵とアメリカの令嬢との結婚談に、さのみの大勢力を持つて居るのであらうか？

オースタ公爵夫人ヘレンはフランス皇室の一族、オルレアンの内親王で、當時伊太利皇帝の位を繼ぐべかりしオースタ公爵に嫁したのである。

どのやうな決心をしたか、その何れの戀人を選ぶであらうかは一人として明言する事は出来ない。

女の心と云へば哀れにも氣の毒なのは、オースタ公爵夫人ヘレンの心情である。不幸、絶望、嫉妬、それがこの夫人のすべてである。夫人は自分の全力を傾けてアブルツヂ公を、この『石炭掘りの娘』と一緒に爲まいとした。最初は皇太后マーグリタの助けを借りて、それを阻止しやうとさへ企てた。が、皇太后は後には、その仲間に加はる事を欲しなかつた。

八年前まだこのローマンスがその第一頁を開いたばかりで、あまねく世間に知れ亘つてゐない時の事、ワシントンのレーノルズ・ヒッツの息、ウキリヤム・ヒットが、西ヴァージニアの炭野で、ミス・エルキンスと戀に落ちた。その時には、もう公爵の眼もこの令嬢の上に注がれて居た。併しヒットは少しの痛痒をも感じなかつた。彼は當時太くエルキンス氏の寵遇を受け、エルキンス氏は又、アブルツヂ公と娘との噂を喜ばず、婿には我がアメリカ人をこそと願つて居たので、自分の息子と共にヒットを勵まして、公爵に對戦せしめたからである。

『兎に角、私は向ふ七年間をあなたの爲めに捧げる。公爵が、平民か、七年後にあなたの「イエス」か「ノー」かを聞かせて下さい』

ウキリヤムはカセリンに、さう云つた。新聞などは逸早く彼等二人の結婚の日取りまでも書き立てたけれども、ウキリヤム當時の伊太利皇太子は非常にお弱くて、一生結婚が出来まいと噂されて居た。ヘレンはオースタ公を受したのではない、その愛情はウエルルス親王の長子クラレンス公爵の墓場へ運ばれて居たのである。クラレンスは政治上の關係から彼女と結婚する事が出来なかつた。其處で彼女は彼の死後、他日の伊太利女皇たる事を夢みて、オースタ公へ嫁した。然るに其後伊太利の皇太子がモンテネグロのエレナ内親王と戀に落ちて結婚した爲め、遂に其野心を果す機會を失つた。

幸か不幸か、皇太子の第一子は内親王であつた。二人の男子を擧げ得た公爵夫人は他日その一人を伊太利皇帝たらしめ得るものと思ひ返しもしたが、其前途は甚だ遠慮である。

自分の悲劇を人の悲劇で償はうとする公爵夫人は、良人の小弟たるアブルツヂ公爵の戀を妨げて、以て聊か快を呼ばうとした。殊にア公は、現皇太子と、オ公と、オ公の二男子と、オ公の弟でア公の兄たるソーリン伯と、都合五人を挾んで伊太利の帝座に近い人である。その繁榮は夫人野心の妨げともなる。

是等の難關に在つて、ア公は泰然たるものである。決して強請的に結婚しようとは冀はず、もしエルキンスの全愛を得ずば一生獨身で通すといふ大覺悟が出来てゐる。

そこで最後の決勝戦が来た。五月蠅いオ公夫人はアフリカに遠征し、オ公は反つてア公に同情した。世間はア公を『眞の小説中の英雄』と呼んでゐる。